

ヒュースケン暗殺事件

一八六一年一月十五日、江戸の夜は雨で暗く、寒かった。しかし、その晩は旧暦によると万延元年十二月五日、新月の四日後だったから、たとえ空が曇っていなくとも月は見えなかったであろう。^①赤羽と善福寺の間にある中の橋の辺りで、古川岸に沿って続いて来た道は狭まっていた。道と土手との間に三棟の町人長屋が建ち並んでいるからで、その辺りは芝南新門前と言われていた。その芝南新門前の中の橋付近、赤羽方から見ると右手に番所があった。当時の江戸町にはそのような番所が数百ヶ所、道路に沿っておよそ二〇メートルの間隔であり、当然四つ辻にも配置されていた。中の橋の番所は正式には戸沢上総介(出羽新庄藩主)頭取組合辻番所とよばれ、その後ろに戸沢上総介の上屋敷が広がり、番所のすぐ脇には馬に乗った武士一人さえも通れないほどの狭い小路が通っていた。

覆面をした五人の男がこの道の両側で待ち伏せていた。全員黒い服をまとい、三人は中の橋の下に、あとの二人は番所の中に身を潜めていた。その時なぜその番所に番人がいなかったか。戸沢上総介頭取組合が十分に機能していなかったか、或いは番人が企みによってどこかに行かされていたのか、今になっては確かめようがない。^②その覆面の男たちが、かれこれ二時間近く待った夜九時頃、四頭の馬の早足の音が赤羽橋の方から聞こえてきた。アメリカ公使館の書記官兼通訳であった、

ヘンリ・ヒュースケンと名乗るオランダ人がプロシア特派公使の晩餐会に呼ばれての帰り道、アメリカ公使館がおかれていた善福寺へ向かってその場にさしかかっていたのである。

レイニアー H. ヘスリンク

すでに二ヶ月前から、プロシア特派公使オイレンブルグ伯爵は、有能で経験豊かなオランダ人をアメリカ公使のタウンゼント・ハリスから借用していたのである。^④アメリカ、オランダ、イギリス、フランス、ロシアと同様の通商条約を強引に勝ち取るために、伯爵は昨年九月三隻の軍艦を携えて来日した。ようやく、その条約の交渉が終わり、この一月十五日、將軍宛にプロシア王からのプレゼントが手渡された。しかし、その後も公使の、日本人に対する不愉快で、そして無礼な振舞いが消えることはなかった。後にオイレンブルグ伯爵は次のような内容の手紙を兄に認めている。

その日の午後、私は外国奉行たちを迎えました。將軍宛のプレゼントを受け取るため、一時に来訪する予定だったにもかかわらず、彼らの到着は三時になっていました。そのため私は会見の初めから不機嫌になっていましたが、プレゼントの交換をするだけの予定であったのに、彼らはまたあの条約の証書を取り出して、日本の外務大臣から幾つかの訂正の必要性を指摘されたと告げたのです。それを聞いた途端、私はもう我慢出来なくなって、声を荒げました。そ

れは効果的でした。彼らは許して欲しいと謝まり、訂正することもあきらめました。そこで、プレゼントの交換は行われました。⁽⁵⁾これは、ペリーとハリスが初めて日本に来た時や、イギリスの公使ラザフォード・オールコックが大いに活用した当時の典型的な「外交交渉」のやり方と同じである。⁽⁶⁾

さて、話を戻して、一月十五日の夜、ヒュースケンは三人の騎馬役人に守られ馬上にあった。堤灯を持った二人の馬丁がこの小集団の前を急いでいた。その日の先頭は小普請組に属する、外国奉行手附出役の鈴木善之丞であった。彼は三十三歳、鹿毛の貸馬に乗り、⁽⁷⁾ヒュースケンの護衛団の責任者であった。ヒュースケンはその次に続き、その両側に二人の馬丁が堤灯を掲げて走っていた。後衛は三十九歳の安嶋幸吉と二十五歳の近藤直三郎であった。この二人も馬に乗り、堤灯を携えていた。⁽⁸⁾その夜江戸はどこも真っ暗だったが、ヒュースケンの居る場所だけは堤灯の光で明るかった。

近付いてくる馬の早足の音に、待ち伏せていた男たちは素早く潜んでいた場から、橋の袂と小路の入り口へと位置をかえた。いずれも刀を鞘から抜き取り、息を殺して身構えた。暗闇を通ってきた小集団が芝南新門前の入り口に差しかかり速度が鈍った瞬間、覆面の男たちが突然飛び出し、気合いをかけて襲いかかった。まず最初に堤灯を焼き消し、馬丁を地に撃ち倒し、彼等を無力にした。善之丞の馬は頭から足に及ぶ強力な一撃によって立ち往生した。⁽⁹⁾後衛の二人の役人は、襲われると同時に遁走した。

覆面を被った二人の剣士はほとんど同時にヒュースケンを左右から襲った。最初の一突きは左脇の下方から心臓に向かっていった。その突きを避けるため、ヒュースケンは身を右方に除けたが、それは自分の腹面を右側の攻撃者に晒す形となった。右方の男は刀を下方から上方に向け

強大に円弧を描くように振り上げ、ヒュースケンが逃れようと馬のわき腹に拍車を入れたとたん、透かさず彼の下腹部に深く切り込んだ。左側の刀の先がちょうど衣服からすべり落ちるように見えた。攻撃が瞬時に起こったこと、また乗っていた馬が拍車の刺激にすぐに応じたため、ヒュースケンは左方からの一突きを避けられたことに対し、一瞬安堵した。しかし、馬が数歩大股で駆け直後、ヒュースケンは突然痛みを感じた。二百メートルぐらい走った時すでに疲れ果て、馬を留め、下馬しようと呼んだ。

二人の剣士は両者ともヒュースケンに一度太刀を浴びせただけで、攻撃の結果を見ずに、皆、即刻その場を立ち去った。攻撃には数分も掛からなかったであろう。護衛のうち傷を受けた者はだれもいなかったが、当のオランダ人だけは致命傷を負い、京極佐渡守(讃岐丸亀藩主)中屋敷の前の通りの片側に横たわり馬丁の一人は彼の側に残った。ヒュースケンは激痛で叫び声をあげ、「私は死ぬ」と日本語で呻いていた。⁽¹⁰⁾役人たちはみな姿を消してしまつたようで、先頭の者は馬が傷をうけていたにもかかわらず、ヒュースケンは付いてくるだろうと思ひ馬を進めていた。しかし、馬が出血のため次第に疲労し、動くことができなくなったので、ついに下馬し、馬を塙に繋ぎ、助けを求めに歩きはじめた。⁽¹¹⁾後衛の二人はずつとヒュースケンの側にいたと報告しているが、⁽¹²⁾三十分もの間一人でその場に放置されていたとの被害者自身の述懐が真実である。⁽¹³⁾

従って、攻撃直後の出来事の順序については実のところ明かではない。ヒュースケンは負傷後すぐにプロシア使節の医者ロベルト・ルシウスを呼んでくれと頼んだという。⁽¹⁴⁾江戸にいる西洋医者の中で、彼を最も信頼できると思っていたのだらう。⁽¹⁵⁾結局助けに来る者が誰もいなかったので、しばらく被害者の傍らにいた馬丁も助けを求めて、そこを離れて

しまい、ヒュースケンは暗く寒い通りにただ一人取り残されてしまった。自分のうめき声以外、彼には下腹部の傷口から脈を打つたびにどくどく流れ出る血の音しか聞こえなかった。恐らくヒュースケンは、過去に起きた外国人や彼等と接触する日本人を狙ったいくつかの攻撃を思い出したに違いない。⁽¹⁶⁾ 日没後暗い道を通って善福寺に帰るのは止めるべきだというハリス公使の忠告を思い出し、それを無視していたことを後悔したことだろう。⁽¹⁷⁾ ハリスは善福寺内でも滅多に自分の部屋から出ることすらしなかったし、寺から離れることもほとんどしなかったことから、外国人に対しての脅迫をヒュースケンより深刻に受け止めていたものと思われる。⁽¹⁸⁾ 多分、ヒュースケンは当時江戸に流布していた様々の浪人襲撃の噂を思い出したであろう。⁽¹⁹⁾ 状況の危険性を十分認識しながら、過去二年半の間、自分の日記では無関心を装っており、事件の二週間前になって再びそれに記入し始めたところであった。

彼はちょうど一週間前の一月七日、アメリカ人の身の安全を論ずるためにやって来た小栗豊後守忠順の訪問について記入している。⁽²⁰⁾ ヒュースケンは、背の高くユーモアに満ちた目をした小栗と非常にそりが合った。⁽²¹⁾ 前年、幕府の使節としてアメリカ合衆国に初めて派遣された小栗は、日本とアメリカ両方の知識を持っており、その意味で当時では実に貴重な人物であった。⁽²²⁾ 帰国以後、一八六〇年十二月十九日、小栗は目付から外国奉行に昇進し、ヒュースケン襲撃の四日前に「亜国江罷越」により「二百石御加増、金十枚・時服三」を将軍から下賜された。⁽²³⁾

程経て、倒れているヒュースケンの周囲にようやく人々が駆けつけた。役人たちは古川を渡り、対岸の有馬屋敷の門を叩き、有馬中務大輔(筑後久留米藩主)の医師山本甫文に助けを求め、ようやく彼の門人北村鎌次と井上三栄を連れて被害者の側に戻った。⁽²⁴⁾ 馬丁たちは芝南新門前一丁目代地の番人五兵衛や忠兵衛・治兵衛等を連れて来た。そのほか、松

五郎、藤兵衛、勘右衛門、吉右衛門、勘三郎、藤七など近所の町人がヒュースケンの途切れることない呻き声に呼び寄せられたのであろう。⁽²⁵⁾ 人々は雨戸を拒架にして、ヒュースケンを載せ、善福寺まで運んだ。二人の医師がヒュースケンの拒架の側を歩き、このオランダ人の腸が傷口からこぼれ落ちないよう、絶えず気を遣った。看護に当たった人々の一人は「苦痛による被害者の甲高い呻き声を生涯忘れることができないだろう」と後に証言している。⁽²⁶⁾

九時半ごろ、役人の安嶋と近藤が先導した小さな行列は善福寺に到着し、ヒュースケンは自分の住まいである本堂の側の別棟に運ばれた。ハリスは、そこでヒュースケンを迎えたらし、被害者自身の口からその晩の出来事について聞いて聞いている。しかし、襲撃とその後の話についての信頼できる目撃者の証言は十時以降のものしか残っていない。⁽²⁸⁾ その頃、息を切らしたハリスの使用人が幕府の赤羽接寓所に泊まっていたプロシア使節の許に着き、アメリカ公使が書いた至急医療援助を頼むという使節宛メモを手渡した。

オイレンブルグ伯爵は随行員と興じていたホイスト・ゲームを中断し、ルシウス医師への連絡を命じた。⁽²⁹⁾ ちょうど医者には床に就こうとしていた時だったが、すぐに衣を着替え、⁽³⁰⁾ 鉄砲を携えた五人のドイツ人を伴ってアメリカ公使館に向かった。⁽³¹⁾ 彼らは二十分程歩き、悲劇のまっただ中に到着した。画家のベルグ氏の証言は次のようである。

ヒュースケンの部屋は薄暗く照明されていました。彼はすさまじい形相で、自分の血だまりの中に横たわっていました。周りには下僕がおり、写真家ウィルソン氏が立っていました。二人の日本人の医者、臍からほとんど腰まで達する大きく口を開けた刀傷に包帯を当てようとしていました。腸が見え、乱れていました。腸の、ある部分ほとんど横に切られていました。ルシウス医師は血だまりの

中にひざをつき、まずそれを、そして他の傷口をも縫い合わせました。仲間の一人は左手でランプを持ち、医師の手元を照らし、右手でヒュースケンの冷たい手を握り暖めようとしていました。被害者には意識はありましたが、目には反応がなく、脈もほとんど感じられませんでした。縫合による極度の苦痛で、患者はひどくうめき、またかすかな声で「私は死ぬのか」と聞き、「眠りたい」とも言っていました。実際に手当に加わっていない人々は、その場の光景があまりに酷く、その血なまぐさい小部屋の様子があまりに悲惨なので、しばしば目をそむけ、戸外の空気を吸うために外へ出たりしていました。⁽³²⁾

ドイツ人のウィルヘルム・ハイネはペリーとも来日したことがあって、今回のロシア使節団にも参加していた。ヒュースケンとは仲がよく、次のように書いている。

ルシウス医師が包帯をし終わった後、被害者の気分は少しよくなったように見えました。彼の蒼白で乱れた形相は少し和み、目はやや生気を帯びました。ワインが欲しいと頼み、それを口に含んだ後、自分のまわりに集まった友達みなに感謝を述べました。私たちは彼の血だらけの衣服を脱がせ、きれいなものに着替えさせ、注意深く彼をベッドに横たえました。そして私たちは彼の衰弱した体を暖かいタオルや湯たんぽであたため、回復させようと試みました。⁽³³⁾

ルシウス医師自身は死の瞬間を臨床講義の調子で報告している。患者にはまだ完全に意識があり、落ち着いてきて、彼の求めによってワインとその後水が与えられた。気分についての質問に対しては衰弱感や腹部の重圧感を訴えた。その頃から苦痛はかなり減少したようだ。何分かの休息後、坐れるように手を貸してくれと言った。呼吸はその時までには正常であったが、突然呼吸困難からゼイゼイと

喘鳴状態に陥った。脈はもう取れなかった。衰弱しきった体力を持ち直させるための努力も空しく、数分後彼は死に至った。ジラール神父は彼の最後の一時間宗教上の慰安を与えた。⁽³⁴⁾

医師が翌朝書いた検死報告書によると、ヒュースケンの死の直接原因は多量の失血によるものであった。傷を負ってから手当てを受けるまでにほとんど一時間半も要し、その間出血が続いたのである。しかし、ある意味で、それは幸運であった。当時の技術は出血を止められる可能性はあっても、腸の内容物が腹腔に漏れた後、腹膜に化膿菌が入らないようにする予防薬はなかった。そのような感染による死は実際に起こった死よりも遙かに苦しく、長引いたであろうと推測される。⁽³⁵⁾

ヒュースケンの傷から判断すると、暗殺者の意図は彼をその場で殺すことであつたと思われる。最初の襲撃者は心臓を目標に、刀を上方に突きあげていたし、もう一人は腹部を斬っていた。前者は成功せず、刀が左腕と胴の間に入り、先端は胸をかすめ、刃は左上腕の筋肉をより深く切り込んでいた。⁽³⁶⁾

* * *

一月十六日、午前一時、ヒュースケンの死後一時間も経たない内に、外国奉行小栗豊後守忠順がハリス公使を訪問した。「小栗は非常に動揺しているように見受けられました。そのような態度を表すことは日本ではとても希なことです。」と通夜の席でハイネは感想を述べた。もとの目付の小栗はハリスに慰めの言葉を述べてから、ヒュースケンの傷跡を見たいと申し出た。遺体を検死した後、忠順は殺人者の逮捕とその処罰のためにあらゆる努力を尽すと約束して帰った。⁽³⁷⁾ 忠順のような経験豊かな奉行にとっては、襲撃の状況とヒュースケンが受けた傷跡の状態とをあわせてみると、これがよく計画された暗殺事件であることは明らかで

あつたらう。

当時、ヒュースケンは江戸においてとりわけよく知られ、好かれた外国人であった。通訳について外国人が書いた証言ではみな口を揃えて彼のことをほめてゐる。リチャード・パッターソンは“The Foreign Service Journal”(外務雑誌)でヒュースケンの性格に関する資料を次のようにまとめている。

身体はたくましく、元気で頭がよく、柔軟で教養があり、重要なことに対しては能力、誠意、協力、勤勉を惜しまないが、細かいことに対しては時には怠慢で忘れっぽく、自分の価値観にすこぶる強い信念を持ち、公平で勇ましく、親切で優しく、しばしば自分の都合を無視しても快く人の世話をし、交際が大好きで、性格は陽気でユーモアを持ち熱意に溢れていました。アメリカ人にも、ヨーロッパ人にも日本人にも、誰にもヒュースケンはとても人気がありました。⁽³⁸⁾

このような理想化されたヒュースケンの性格や能力の評価は、彼が毎晩遅く帰宅し、極端に危険なことを一ヶ月半以上も続けるような人物であったというハリスの評価に言及することをおこたっている。

ヒュースケンは無意識に自分が暗殺の標的となるよう仕向けていたかのようなのである。先ず、江戸にいる西洋の外交官の中でも彼はとりわけ目立ち、狙い易い人物であった。彼はどこに行くも馬に乗り、待ち伏せせられた日と同様にしばしば運動のため日没前に江戸城の廻りを一周していた。⁽³⁹⁾ 彼が馬で江戸の町のどこへでも出かけ、人々は「ヒュースケン」と呼びかけた。他の外国人もそのように呼ばれていたことから、どうやら彼の名前はほとんど「外国人」という意味になってしまっていたらしい。⁽⁴⁰⁾ 政治的暗殺を企てる人間にとって、ヒュースケンは特に目立ち、彼の日常行動を下調べすることは実にたやすいことであった。

ヒュースケンが死んで間もなく、様々な噂が出回り始めた。いつものように、多くの外国人が幕府に抗議し、將軍の家来が陰謀に加担したのではないかとの嫌疑をかけた。日本人は、当初から浪人や外様大名の家来などに疑いをかけていた。ヒュースケンが暗殺された時、そのような人間が江戸には多数いた。⁽⁴¹⁾ ベリーの軍艦外交によって日本の「光榮ある孤立」の時期は終わった安政期から彼らは江戸に集まり、自らを志士と称していた。⁽⁴²⁾ 志士は武士階級の中で身分が低いほど、そして貧しいほど、日本の名譽を重視し、テロリズムに傾倒していた。西洋によって受けた日本の屈辱に対して最も憤慨していた者はこの志士たちであった。

徳川封建体制下、下級武士であった志士には自分たちのエネルギーや精神力や愛国心を積極的に発揮する機会を得ることは許されなかった。一度も発砲されなかったが、軍艦による力の誇示と暴力的脅威によってベリーやハリス、ヒュースケンやその後来日した西洋の外交官たちが治外法権を含む通商条約を日本に押しつけることを志士たちはただ傍観していなければならなかった。彼らの軽蔑する外国商人が短期間で横浜に共同体を作り、また使節たちが幕府の保護の下に公使館を江戸城の近傍に構えた時も何もできずにただ見守るほかなかった。それは、数百年の間交わることなく存続した徳川時代の外交関係に比べ、僅か六年間のことにすぎなかった。

ハリスは条約交渉の際、阿片戦争の例を持ち出して、もし幕府が鎖国政策を断念しないのなら、日本も戦争が起これば中国と同様に敗北するだろうと幾度も脅迫した。是が否でも戦争だけは避けるべきだという意見によって、幕府は徳川支配の没落を早める政策の決定を強いられた。志士たちは中央の権力崩壊から生じた権力闘争の中で、自らを日本の救国者と見なしていた。しかし、具体的な救国の方法については明確な認識を持たず、この点については様々の異なる意見があった。しかし、全

国の志士の共通の意識は、幕府の宥和政策に対する不満と「神州の国士をわがもの顔で踏み汚している」外国人という敵に対する憎しみであった。⁴⁴⁾

志士は全国の諸藩から江戸に集まって来て、剣術道場や私塾において親交を深めた。そこで、封建制度の忠節という観念と入れ替わりに、天照大神の子孫であり日本国統一の永遠の象徴である、神と同格の天皇というイデオロギーを見出した。徳川時代の民衆に向けての道徳宣伝はいつも殿様に対する忠節を謳っていたので、その結果、諸藩の武士たちはそれぞれ自分の藩の殿様に忠節を尽くすことになり、協力することはなかった。天皇を中心とする新しい道徳観念は十八世紀の国学に始まったものだが、武士階級の間急速に支持を得たのは一八五三年のペリー来航以降のことであった。民主主義の伝統のない当時の日本において、国家的政治計画と言えるようなものの樹立を目指して模索をはじめたのは実にこのみすばらしい武士たちであった。彼らが洗練された綱領を成文化するところまで到達できなかったことは真に無理もないことである。西洋との最初の対決の渦中で、彼らが創り上げたものは「勤王」と「攘夷」というスローガンに要約されている。

ヒュースケン暗殺の九ヶ月前、旧曆三月三日(一八六〇年三月二十四日)、水戸浪士の一団は桜田門外で大老井伊直弼を殺し、幕府に対して最も強烈な一撃をくらわした。志士たちは、直弼を、憎むべき条約を結び、反対運動を徹底的に強圧する幕府側の責任者と見なしていたから、全国の志士の目には水戸浪士が大成功を取めたと映った。その武功に倣いたい、または出来ることならそれを凌ぎたいと目論む志士は数知れなかった。彼らの経済的に不安定な状況と政治的地位の危険性から考えると、志士たちは西洋との戦争の可能性にすら恐怖感を抱くわけがなかった。それどころか、彼らは外国人商人に自らの剣術と精神力とを誇示した

がっていた。それゆえに、全ての外国人外交官が志士の闇討ちの対象となりうる危険性があつた。

* * *

ハリス公使は、前述のように、この危険性を十分察知していた。アメリカ公使館の中の緊張度はしばしば高まり、アメリカ公使は無感覚状態になるまで泥酔し、数日間起き上がれないほどであった。一方、ヒュースケンはそのストレス状態の中であらゆる危険の可能性に否定的反応を示した。この二人の男は江戸の危険性に関して同意することができなかった。二十七歳年上のハリスは、ヒュースケンを自分の息子のよう愛していたことを何回か明言している。彼らが下田に孤立して完全に相和して過ごした年月を考えると、その発言は疑えない。それにもかかわらず、ハリスがヒュースケン暗殺者の迅速な逮捕と処罰とをあまり望んでいなかったことがいくつかの史料から読み取れる。ハリスがヒュースケンに対してどれほど複雑な気持ちを抱いていたのか明言することは難しい。そしてアメリカ公使の冷静さについての他の外交官の証言とは別に、ハリスが実はこの暗殺によって自分が装っていたよりも更にはげしく動揺していたということを示す証言も残っている。

ヒュースケン暗殺後、あらゆる外交官の中でハリス一人が江戸に残ったということは事実である。彼以外のイギリス人、フランス人、オランダ人などはみな葬儀の後に江戸を退いた。⁴⁴⁾なぜハリスが日本でそれほど高く評価されていたかという問いに対し、それは主にこの時期の彼の不転の姿勢と高潔主義に基づくものではないか、とオリヴァー・スタットラー氏は答えている。⁴⁵⁾他の西洋外交官と一緒に横浜に逃げることは、ハリスにとって自分の敗北を認め、暗殺事件の前に得ていた江戸への滞在権などの外交成果を失い、又、イギリスやフランスの海軍部隊力に守

られることを意味していた。またその時点では、アメリカの軍艦が江戸湾に投錨してはいなかったから、ハリスは他に選択の余地がないことを自覚していたのかも知れない。

したがって、アメリカ公使が外では自宅内とは異なる態度をとっていたのは当然であろう。アメリカ商人であり記者でもあるフランシス・ホールは、日本に住んでいる外国人の下僕や出入商人にいろいろ尋ね回り、情報集めをした。一八六一年一月三十一日、次のように日記に書いている。

私たちの公使が、今日まで「ヒュースケンの暗殺についてアメリカ政府に」報告していないということはほとんど確かであります。彼はそれを書くことやアメリカ人の権益を守ることができている状態ではありません。彼はヒュースケンの暗殺によって動揺し、極めて不安になり、不眠症になり、疲れ果てていると言われています。我々「日本に住んでいるアメリカ人」にはその「言い訳の」意味が分かっています。何たる恥辱でしょう。こういう時期に、自分の気分を統御できないような人物が代表者とされているのは何と危険なことでしょう。我々が江戸で聞いている噂は全て誤っているのです。か。「公使は」ピストルを片手に自分の部屋を行ったり来たり歩き回っている、とか、またはより恥すべきことに、「公使は」役人に「ボタンをかけられる女を善福寺によこしてくれ」と頼み、その依頼によって女が来ると、どうしてあんな醜い老女を来させたのか、私は女にボタンをかけてもらうことを望んではいない、女を××したい、と言ったとか。この男は本国では、この半未開の国へのアメリカ合衆国の代表者、熱心にキリスト教と西洋文明を振興させるに適切な人物であると考えられています。⁴⁶

以上のことよりもっと不思議なことに、ハリスはヒュースケン襲撃の話

を被害者自身の口から初めて聞いた人物であるにもかかわらず、正式報告書を除いては、その晩の話や日記などに詳しく書いた形跡がない。その上、ハリスはその殺人事件が「暗殺」であったことを決して認めなかった。この点について、東京南麻布の光林寺にあるヒュースケンの墓碑とイギリス公使館日本人通訳伝吉のそれとの間には注目すべき違いが見られる。伝吉はヒュースケン殺害のほぼ一年間、一八六〇年一月二十九日の日曜日の午後、東禅寺の門の前で突然一人の志士又は何者かに殺され、光林寺の墓地に埋められた。オールコックはその殺人を特に「暗殺」と呼び、「日本人暗殺者によって殺された」というような碑文を刻ませた。ハリスはこの先例を無視して、ヒュースケンの墓碑に簡単に「江戸にて死亡した」という字句を刻ませている。⁴⁷

幕府がヒュースケンの暗殺者をどうしても逮捕できなかったことに対しハリスは弱い抗議しかせず、非難することを全く拒んだ。ハリスは他の外交官の露骨な敵愾心に直面しても、ヒュースケンの殺人事件に就いては幕府の肩を持っていた。後の一八六一年末にハリスはヒュースケンの母親のための一万ドルの見舞金を受け取った。それは、一八六三年六月のリチャードソンの殺人事件（生麦事件）で補償金二万五千ポンドを受け取るまで薩摩に攻撃をかけるほどのイギリス側の過激な対応に比べると、非常にささやかな要求であった。以上のような事実を一体どのように解釈したらよいのであろうか。実際ハリスは心中穏やかではなかったであろう。恐らく、ハリスはヒュースケンが自分の代わりに殺されたことを察していたかも知れない。ハリスは最初に通商条約の交渉をした人物であり、オリヴァー・スタットラー氏が素直に叙述しているように、西洋外交官の脅迫政策を作りだし⁴⁸、後に続く各国の対日通商条約は日米通商条約を先例として締結されることとなった。実際には、志士の標的となるべき者はヒュースケンよりもアメリカ公使であったことは明白で

ある。

しかし、ヒュースケン は日米通商条約だけでなく、通訳や世話人として日英、日蘭、日普通商条約にも加わっていた。その上、江戸の町を馬に乗り歩き、ひときわ目立つ存在だったので、そのことだけでも志士は彼を憎んでいたであろう。志士の中に自分の馬を持つ者は殆どなく、しかも公然と乗馬できるというのは数百年の間武士の特権であった。ヒュースケンはこの武士の特権を侵害する初めての外国人であり、それに自分の命を支払ったとも言える。彼の殺害の理由を知るためには、若いオランダ人を志士の目を通して観察することにより、志士の外国人観を理解する必要がある。ヒュースケンの年齢(殺された時はほぼ二十九歳)、運動能力、乗馬できる身分、教養や言語知識や条約交渉参加などから志士たちは彼を自分等と同類の者と感じていたろう。志士は自らを日本で第一の国防隊と自認していたから、ヒュースケン を日本侵略外国人の尖兵の一人と見ていたであろう。

以上のことを考えると、多くの目付を置きながら、実際に暗殺者を見つけられなかった、と幕府が公言し続けていたことは非常に信じ難い。一八六一年十一月二十七日、この事件に関わるハリスの最後の報告書は、「あの犯人は逮捕され、刑罰を受けるべき者であるが、それが来月に行われるのか、または来年になるのか予見することはできない。」という老中安藤対馬守信正(一八一九—一八七二)の興味深い発言を引用している。幕府側は犯人に対する刑罰の必要性を十分認めていたが、ここではそれよりもそのタイミングの問題をあげていた。それ故、当時幕府は恐らく暗殺者の身元を割り出したとしても、何らかの理由で逮捕処罰はできないと判断した。

* * *

暗殺に至る襲撃の経過を今一度振り返ってみると、待ち伏せた男たちが気合いをかけてヒュースケンと彼の護衛に襲いかかったという点は西洋側と日本側の残存史料全てにおいて一致している。襲撃中の連携から判断して、みなが同じ地域の出身者であったとすれば、ヒュースケンの後衛には彼らの気合からその出身地を特定できたであろう。日本側の史料にはどれにも「何者不知」とあるが、「万延筆記」では「六日、池田播磨守様御役宅にて、付添人夕方迄御調有之候、全く薩州家と申風聞。」とある。従って、付添人「護衛者」の証言で襲撃者が薩摩出身であったことは幕府による翌日十二月六日の取調べから分かっていた。

東京大学史料編纂所所蔵の「大日本維新史料稿本」に収録されている幕末時代の史料の中には、もう一つヒュースケン暗殺事件を照らし出す文書が載っている。それによれば薩摩志士柴山愛次郎(一八三六一—一八六二)はその話を日記に記し、暗殺者たちの苗字を列挙することができるとど熟知していたようである。

九月二十五日(一八六一年十一月二十八日)、蘭牟田子、茗藩(マク)の浪人清川八郎と申者と前かた江戸の地を立退きしより、方々に出没せしと聞しに、今は水藩に潜り在るより、こもまた由ある事也。蘭牟田子は我等旧知の友にして、抑肝付家の家士也。為人質直慷慨、能義に勇て、頗る胆略を以名あり。(中略)

去歲の末つかた米夷のアケンクハンてふ(御勝手方御家老に当る)官なるヒヨスクハンとやら申夷匪を殺害し江府に在館する五ヶ国の外夷を一朝に引かしめ江府の地を清ふしたるは蘭牟田子、益満子、樋渡子、大脇子、神田橋某の功にして、蘭牟田子その主宰也しと。その功業殆ど十七士「桜田門」の業に彷彿すといふべし。⁴⁹⁾

柴山がこれを書いた当時彼はまだ九州にいたことから、この記録は伝聞に基づいたものと見なされなければならない、事実の記載においては誤

りも含まれている。しかし、柴山は一八六二年薩摩藩尊攘派が弾圧された寺田屋騒動で死亡したことから窺えるように、同じ薩摩の志士であり、その伝聞は単なるうわさではなく、志士同士の情報交換で得た信憑性のあるものと考えてよい。

そのあらましを語らんに初め五人の面々江戸邸に会する事を得、今日の晩、明すのよ、灯の蓋合ふ度事に、各志をあかしければ、くまなく見ゆる勇士のはらわた微塵ものこさずかたらひけるに、慷慨のころ、已まれんまま、その大策略をぞおもい立、誰とは不知一人の申様、(中略)

かくして日数を経たれば、何れも大胆不敵となりて、天下に一物の恐れなき風情なれば、今こそと申合せ、彼ヒヨフスクハン(ヒュースケン)は狡黠無双の夷にて、交易のうへ奸ましき業多く、我に毒を流す事不少、商人の憂となる事聞へければ、是こそ望む処の者と、(中略)

十二月十七日夜は、例の如く列れ立、赤羽根橋に待設、兼て申合せ、何れも人には譲らまほしくおもふ事ながら、猶予してハ事を誤らんと、一番二番を籤をもてさだめ置事也しに、その折益満子一番串に当りて赤羽根橋に立れ、外ハあたりひそまりしに、折能も望所のヒヨフスクハン馬上より通り、扈從三、四人皆馬上也。外に警衛の者など附添いぬ。益満子は天の與と勇み、我前に至る比をり、すと進み寄、思ふ処の夷人をさしければ、夷人はどふと馬より落ち、引抜刀をもて扈從の夷人に切当つれば、皆散々に逃げ去りぬ。控へし面々もすかさず馳せづき、そこ倒れし夷人を万断になれと切ちらし、長居は大事の馬所と逸早く其場を立去り御長屋に立戻り、從容たる形にて不知まねしてありければ、唯一人かくと知る者なかりけり。

活動の拠点からはるか隔った九州にあって、柴山にはヒュースケン暗殺の準備と実現とはただ想像することしかできなかった。しかしそれを考慮しても、この話は極めて真実に近いものであるということとはできる。

最初に目に付くのは柴山が襲撃に直接関係ある者として五人の名前しか挙げていないことである。ヒュースケン自身の証言によれば彼を襲った人の数は七名としていたので、今まではそれが正しいとされてきた。しかし考えてみると、襲撃の一瞬は混乱状態であり、提灯もかき消されていたので、襲われた人間が襲撃者の数をはっきり数えることは無理だったであろう。それ故、この点については柴山の記載はヒュースケンのものでより信憑性が高いと思われる。この五人の薩摩志士についての情報はかなり限られている。まず、益満新八郎(一八四一—一八六八)は幸運にもヒュースケンを最初に襲う権利を与える籤を獲得したが、彼は当時二十歳の青年であった。死亡したのは一八六八年で、彼が明治維新の結果を見ることはなかった。柴山日記によると、彼は橋の方角から襲ったとあり、それはヒュースケンの左側であったから、最初に左側から襲われたという被害者自身の証言と全く一致する。西洋側の史料と日本側のそれとがこの微妙な点において一致するところから、ヒュースケン暗殺事件の確実な解決は始まると言つてよいである。しかし、柴山が「万断」と表現した壮烈な滅多斬りとは対象的に、心臓を狙った益満の突きは、上腕と胸部との間に空しく留まるだけに終わった。

次に恐らく伊牟田尚平(一八三二—一八七〇)がヒュースケンを右側から襲い、腹部を斬つたのであろう。柴山は彼を暗殺者の「主宰」と呼んでいる。被害者と彼とは地球の反対側ではあるが、偶然にも同じ年に生まれている。薩摩藩指宿郡喜入村出身の彼は、十五歳で鹿児島城下にやって来て、島津斉彬の侍医東郷泰玄の許で医学を始め、後に長崎で蘭学を学んだ。一八五四年、二十二歳で初めて江戸に移り、一八五七年に

脱藩し、勤王運動に参加するため京都に上った。ヒュースケンの暗殺後は逃避行を続けていたということで、鹿児島に再び現れたところで鬼界ヶ嶋に流された。後に許され、西郷隆盛と協力して討幕運動を行った。維新の後、京都や大津の辺りで辻斬り強盗が起り、伊牟田は責任を負わされ、京都の薩摩屋敷で自刃させられた。⁵³⁾

樋渡八兵衛の名は、もう一人の薩摩志士である横山資之の日記にも記されている。文久元年六月二十二日(一八六一年七月二十九日)に次のように書かれている。神田橋と樋渡の両者が、高輪薩摩屋敷に逗留することによって藩が困惑しているという理由で九州に帰るよう命ぜられた。⁵⁴⁾ 神田橋直助(一九三―一八六二)は、一八六二年薩摩藩を脱藩し、寺田屋騒動の後に切腹した。⁵⁵⁾ 大脇という人物は柴山愛次郎日記以外からは見出すことができなかった。以上、ほんの僅かな伝記からも窺うことができるように、これら五人の志士はみなヒュースケンと同年代の教養ある下級武士で当時のインテリであったと言えるであろう。

* * *

これら薩摩出身の志士がみな「虎尾の会」のメンバーであったことを柴山は先に引用した日記を書いた時にはまだ知らなかったであろう。この志士の小団体の名称は、そのメンバーが理想に導かれ、たとえどこまで行こうとも恐れを知らない、という勇敢さを意味していた。『易経』によれば、「虎の尻尾を踏む」という表現は極めて危険のある状況を意味するものである。「虎尾の会」の志士はその時初めて、自分の藩の殿様に尽くす、江戸時代の狭い意味の典型的な忠節に替わって、日本のために力を尽くそうという意志を抱いた。その会の主宰者は、庄内藩、現在の山形県出身の浪人清河八郎(一八三〇―一八六三)であった。⁵⁷⁾ 父は五百石の豪農で郷士であり、酒づくりの店を営んでおり、息子は仲間が一文も

持っていないような時にでも、容易に現金を手に入れることができた。鹿児島から松前までは日本全国を旅行した経験があり、社会のどの階層の人とも付き合うことを学んでいた。江戸のお玉ヶ池に自分の文武塾があり、ヒュースケン暗殺の時期には、清河は四書五経と剣術を教えていた。

一八六〇年三月、桜田門外の変によって清河は突如奮起した。幕府の力が決然たる志士の行為を阻止したり犯人を逮捕することも出来ぬ程不十分であったことを見て、徳川秩序の崩壊が差し迫っていることを察知した。そして、清河は決意の面では自分が日本の誰にも劣らないということを確認し、同志を集め、尊皇攘夷を信奉する「虎尾の会」を組織した。当時その団体は十五人だけで構成され、清河と薩摩志士の五人の他に、幕臣が二人、そして日本各地出身の浪人と町人が七人いた。⁵⁸⁾

このグループを結成し、清河は江戸の志士の間で名声を高めるための機会を捜していた。一八六〇年九月のプロシア使節の来日により、江戸湾に停泊する外国艦隊にも一つ一つの艦隊が加わった。もう一つの不平等な条約を幕府に押しつけられる十二月前半から、清河はどこを撃つべきかということを決めていたであろう。暗殺が前もって入念に準備され訓練されたものであることはその完璧な達成から読み取ることができる。密かに準備することの困難な高輪屋敷で、「虎尾の会」の薩摩志士が自らヒュースケン暗殺を計画したということはあり得ない。寺田屋事件からもうかがえるように、公武合体を進める島津久光はこのような意図的な冒険主義に巻き込まれなくなかった。それ故、暗殺者は襲撃準備の計画を立てるための別の基地を持っていたと思われる。勿論、清河のお玉ヶ池塾はそれに最も適当な場所であった。

その上、清河は後に「ヒュースケンの殺害者」として知られていたことや、自分がその暗殺の責任者であるとしばしば触れ回っていたことな

どの証言が残っている。⁶⁰柴山は同志の薩摩志士のため暗殺の名誉を主張しているが、これらの状況をみると清河がその暗殺を計画したあと、その実行を虎の尾を踏むことを怖れないメンバーに委任した、と暗殺後百三十三年の今、結論づけることができよう。全国各地の志士が虎尾の会に加わったにもかかわらず、暗殺そのものが薩摩出身の志士だけに委任されたのは興味深いことである。

この事実に関してはいくつかの理由がある。まず最初に、襲撃が行われた地点の付近には、三田二丁目、芝三丁目、高輪の三箇所が薩摩屋敷があった。暗殺者は薩摩屋敷で暗殺の準備をすることはできなくても、二十分以内の距離にある薩摩屋敷に襲撃後潜むことはできたであろう。一八六一年七月、暗殺に加わった二人の志士が高輪屋敷か九州に帰るようにと命ぜられたことはすでに樺山日記に見た。彼らが一月十五日から幕府の管轄権の及ばない高輪屋敷に潜んでいたという可能性は十分にある。更に、暗殺者の身元が幕府にわかっていたらならば、後の生麦事件と同様に薩摩出身の志士が藩から守られる可能性は高い。最後に、「虎尾の会」のメンバーは理想主義者ではあるが、ヒュースケン襲撃の成功はその襲撃者間の協力や連携にかかっていた。もし言葉の誤解や、他藩出身間の競争心などがあれば、その連携を成し遂げることはできなかった。襲撃は完全に実行され、ヒュースケンは殺され、事件は初めに清河が予測した通り進行した。幕府の疑いの目は薩摩志士に向いていたが、江戸におけるその数がいかに多かったのか、清河は幕府の目付がお玉ヶ池の戸口に間もなくやって来ることを恐れる必要はなかった。しかし、結局清河は同年の春、江戸から逃走した。そこでヒュースケン暗殺に直接係わっていなかった「虎尾の会」のメンバー八人が小馬伝町の牢屋に入れられた。当時の暴力的な尋問の方法を以て、幕府は囚人から確実にヒュースケン暗殺に関する全ての情報を引き出せたとはいえずである。暗殺に

直接係わっていなかった人々を釈放するための圧力が幕府にかかる以前に、逮捕された八人の内の四人が拷問で死亡し、さらに一人、清河の妾のお連という女性も釈放された当日に死亡した。

逃走中、清河はじっとしてはいなかった。逃避行中の経験についての長い漢文日記を書き、尊皇攘夷の宣伝もしていた。全国の志士と接触しつつ、ついには二三五人の浪士を召集し、一八六三年この勢力を従えて江戸に帰った。⁶¹そこで幕府に特別攘夷部隊の形で、その小軍隊を雇うよう交渉した。多数の貧しい急進派や物騒なやっかい者を治めることができる利点を考慮し、幕府は清河の提案を承諾し、彼の支配下の浪人たちを雇うこととした。⁶²その時点から、清河の威信は目ざましく高まったが、彼が実際に幕府の命令に従い浪人部隊を使うことに協力するつもりであったかどうかは疑わしい。当然、幕府もその件を疑っており、清河の権力があまりにも大きくなる以前の段階で彼を消してしまっただ方が良かろうと目論んでいた。

一八六三年五月三十日、清河は金子与三郎の招待を受け、五時間以上談論を交わし、酒肴でもてなされた。その帰途、一の橋で七人の幕府の家臣に襲われた。⁶³この一の橋はヒュースケンが暗殺された中の橋から五〇〇メートルと離れてはいない。その殺人が単なる偶然であったのか、或いはヒュースケン暗殺の黒幕であった清河に対する報復であったのかは不明である。⁶⁴清河の死体はその晩斬られたままの状態で見送りにされた。首は落ちかかっていたという記述もある。暗殺の噂を伝え聞いて清河の友人石坂周造（一八三二—一九〇三）は現場に急いだ。故意に「これぞ不倶戴天の仇」との声をあげ、清河の首を切り取り、死体の羽織にそれを包み、幕臣で浪士隊を支配していた剣士山岡鉄舟の自宅に運んだ。後に山岡は伝通院に然るべき墓を建てたそうである。

* * *

ヒュースケン暗殺は我々に電光のような速さで志士の世界の内側を覗かせてくれた。しかしその暗殺は志士の目を通してしか見ることができない。その後一八六三年に薩英戦争が、一八六四年には四国艦隊の下関砲撃が起こるまで、志士の意図は、明らかに戦争を誘発することであった。その同じ時期に幕府は志士を制し処罰しようとしていた。一八六二―一八六四年、最も過激な急進派の大多数が討幕の無益な反乱の中で死んだ。幕府と外国の攻撃の後に生き残った者たちは自らの政治計画を見直さなければならなかった。「尊王」の旗印は捨てなかったが、一八六四年以後、志士は取りあえず「攘夷」をやめた。それ代わる彼らの新しい政治計画は「富国強兵」というスローガンに要約された。一八六八年、このより洗練された新綱領に支えられて、幕府を倒すことやその権力を奪い取ることに成功し、志士は目的を達する名目上の頭として、日本国民全体の活動力の向かう焦点として、天皇を彼らの望んでいる位置に置くことに成功した。

ヒュースケン暗殺事件の現代的意義は、個人的悲劇である点を除いて、逆説的に言えば、死者そのものの重要性よりも暗殺者の精神を洞察することができるという点にある。志士の意見がどれほど保守的であったとしても、彼らは近代日本の英雄となった。因みに元の「虎尾の会」のメンバーを見てみると、明治後期に十五人の内七人が贈位されている⁽⁶⁵⁾。この七人のうち少なくとも清河八郎と神田橋直助の二人はヒュースケン暗殺事件に係わっていた。志士の理想が明治の日本全体の方向決定の原理となっていたのである。一八六八年当時、国民の主権が一応然るべくこの様に定められた後にも、今「近代日本」と親しみを込めて呼ばれている国家の成長はまだ「武士精神」に溢れたものであった。外見的

には更に西洋に似て来た日本の国家の志には、西洋の国々が与えた屈辱に復讐し、凌駕するという執念があった。

[注]

- (1) 以下、日本旧暦は漢数字で表示す。
- (2) 残されている日本側の史料では襲撃者の数は幾分異なっている。東京大学史料編纂所所蔵「大日本維新史料稿本」No. 0170/5/1224 (以降「維新稿本」と略す)。参照: 『肥後藩国事史料』には五、六人。同「万延筆記」には十二、十三人。同「雑書集」の近藤尚三郎の報告書には「芝赤羽根森本町辺罷通候御面体不相分侍之者戸澤上總介番所横町より四五人中之橋より五六人拔連」。同芝南新門前「益田弥兵衛届書」には二十人、三十人。同「名主田中権左衛門届書」には三十人。
- (3) 東京大学史料編纂所所蔵『統通信全覧』米国書記官「ヒュースケン」遺書一件の部(以下「統通信全覧」と略す)には「文久元年四月二十六日、当日附添シ後衛ノ士官罪科ノ宣告ヲ送致セル閣老ノ書翰」によると、「辻番人取放以来右奉公差構」辻番人新吉、善助、又六、辰右衛門は解雇されていた。「Papers Relating to the Foreign affairs of the United States」Washington: Government Printing Office, 1863, 798頁、同様。
- (4) 今宮新「ヒュースケンのことば」『史学』36巻、2/3号(1963): 1-20。
- (5) Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg: "Ost-Asien 1860-1862." Berlin: Ernst Siegfried Mittler, 1900, 149頁。
- (6) John McMaster: "Sabotaging the Shogun. Western Diplomats Open Japan, 1859-69." New York: Vantage Press, 1992。
- (7) 『統通信全覧』附録の「万延元年十二月欠日借馬渡世音吉ノ願書」。
- (8) 「維新稿本」の「雑書集」。
- (9) 『統通信全覧』附録の「万延元年十二月欠日借馬渡世音吉ノ願書」。
- (10) 『統通信全覧』には「万延元年十二月六日善福寺ニ於テ外国奉行ト公使ノ対談書」。同「Wilhelm Heine: "Eine Weltreise um die nordliche Hemi-

- sphäre in Verbindung mit der ostasiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861." Leipzig: Brockhaus, 1864. 3巻' 44頁。
- (11) [A. Berg:] "Die preussische Expedition nach Ost-Asien. Nach amtlichen Quellen." Berlin: R. von Decker, 1866. 3巻' 151頁。
- (12) 「維新稿本」の「雜書集」。
- (13) Heusken "Japan Journal" 223頁。
- (14) 「維新稿本」の「雜書集」。
- (15) 當時の江戸に外国人医者がはつてゐた Dr. Robert Lucius, イギリス人 Dr. Myburgh とイギリス公使の Rutherford Alcock の三人がいた。
- (16) 以前の襲撃は一八五九年八月二十五日、横浜：ロシヤの士官一人、乗組員二人。同年十一月六日同所：洋服を纏つたフランス領事の中国人下僕。一八六〇年一月二十九日、江戸の東禅寺門前：イギリス公使館の日本人通訳熊野の伝吉。同年二月二十六日、横浜：オランダ商船長一人。同年三月二十四日、桜田門外：太老伊井直弼。"Note on the Political Situation and State of Affairs in Japan." Public Record Office, F. O. 46/11 pp。
- (17) Henry Heusken: "Japan Journal 1855-1861." Jeannette C. van der Corput と Robert A. Wilson 註。New Brunswick: Rutgers University Press, 1964' 223頁。
- (18) Dirk de Graeff van Polsbroek: "Journal 1857-1870." Herman J. Moes-hart 譯。Assen/Maastricht: Van Gorcum, 1987, 57頁。
- (19) J. K. de Wit: "Maandelijks verslag over December 1860/Januarij 1861" ホンマ 國古古文書館 Algemeen Rijksarchief: Kolonien 1067, Cons. Yoko. no. 3/40-3/81. 東京大学史料編纂所近代史料部蔵の横山伊徳氏の提供に感謝を表す。
- (20) Heusken: "Japan Journal", 219, 220頁。
- (21) その肖像は田中一貞『万延元年遣米使節図録』東京：大正九年を参照。
- (22) "The First Japanese Embassy to the United States of America", Tokyo: The America-Japan Society, 1920, 207頁。
- (23) 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料：柳宮補任』東京大学出版会 1983年 6巻 5頁。
- (24) 日本人医者が二人 Berg, "Preussische Expedition", 148頁、名前は『統通信全覽』附録「万延元年十二月欠日外国局調役並に商議書」に記載あり。
- (25) 『統通信全覽』上記引用文中「金一分」である。
- (26) Francis Hall: "Japan through American Eyes: The Journal of Francis Hall, Kanagawa and Yokohama, 1859-1866", F. G. Noteheller 編。Princeton: Princeton University Press, 1992, 294頁。
- (27) ホリスの報告書に「Heusken: "Japan Journal", 223頁。
- (28) A. Berg: "Die preussische Expedition" 3巻' 148-151頁、Max von Brandt: "Dreihundertdreissig Jahre in Ost-Asien. Erinnerungen eines deutschen Diplomaten." Leipzig: Georg Wigand, 1901, 130-31頁、Heine: "Eine Weltreise", 3巻' 42-60頁。
- (29) Brandt: "Dreihundertdreissig Jahre", 130頁。
- (30) Berg: "Preussische Expedition", 148頁。
- (31) August Eulenburg 使節の随員、Freiherr von Richthofen 地質学博士、Max von Brandt 使節の随員、A. Berg 画家、W. Heine。製図家兼芸術家 Berg, 上記注 (29) 引用文中。
- (32) Heine: "Eine Weltreise", 44頁。
- (33) Heine: "Eine Weltreise", 51-52頁。
- (34) 東京大学史料編纂所蔵「モノクロフィルム」 「検死報告書」 "Despatches from U. S. Ministers to Japan at National Archives, Yedo January 22 nd 1861, Enclosure no. 1 with dispatch no. 3 dated January 22 nd 1861."
- (35) Lucius, 上記注 (33) 引用文中。
- (36) Heine: "Eine Weltreise", 51-52頁。
- (37) Heine: "Eine Weltreise", 46頁。
- (38) Richard S. Patterson: "Henry C. J. Heusken, Interpreter to the First American Consular and Diplomatic Posts in Japan." "The foreign Service Journal" 24巻' 7号 (1947年7月) 14頁。ホルルのオリヴァー・スタムナー氏の提供に感謝を表す。
- (39) Eulenburg: "Ost-Asien", 150頁。
- (40) Hall: "Japan through American Eyes", 295頁。
- (41) ホリスの領事 De Witt に「はるく、当時江戸には六百人の浪人がいた。

- (42) Marius Jansen: "Sakamoto Ryoma and the Meiji Restoration." Princeton: Princeton University Press, 1961, 95頁。
- (43) 小山松勝一郎『清河八郎』東京、新人物往来社、1974, 103頁。
- (44) Payson Jackson Treat: "The Early Diplomatic Relations between the United States and Japan 1853-1865." Baltimore: The John Hopkins Press, 1917, 164頁。
- (45) Oliver Statter: "Shimoda Story." New York: Random House, 1969, 566-570頁。
- (46) Hall, "Japan through American Eyes", 299頁。注(33)をも参照。
- (47) Oliver Statter: "Shimoda Story" 上記引用文中。墓碑は宮永孝『開国の使者—ハリスとユースケン—』雄松堂、1986, 199-200頁。
- (48) Oliver Statter: "Shimoda Story" 上記引用文中。
- (49) 「維新稿本」の「柴山愛次郎日記」。
- (50) 注(47)に同じ。
- (51) 『明治維新人名辞典』907頁。
- (52) 「伊牟田がこの時使用した刀は、三善長光作と伝える無銘の長さ二尺の物。八郎は早速もらい受け、文久三年春白鞘に改め、その鞘に次の文を書きつけた。伊牟田真風、米国訳虜を赤羽に屠りし刀なり。文久癸亥の春、磨きて更にその室を修す。壮士冠を衝く故事在り。吾が皇の徳義、威盛ならんと欲す。尺余り短剣、醜虜を屠る。殉国の名声、海内に轟く。醜ひとを斬り屠りてし秀の剣、御国の後の宝なるらん」小山松勝一郎『清河八郎』東京：新人物往来社、1974, 112頁。
- (53) 『明治維新人名辞典』122-3頁、勝田孫弥「薩摩藩士伊牟田尚平略史」、『史談会速記録』138号(1905)、安藤良平「国事執筆者の映像—伊牟田尚平について—」、『跡見学園女子大学紀要』23号(1990): 25-37頁。
- (54) 「維新稿本」、清川八郎の『潜中紀事』にも記載されている：「樋渡八兵衛為薩郎勇士、固與吾深相結者、嘗與真風等斬譯虜於赤羽根、足以知其為人也。」
- (55) 「維新稿本」の「樺山資之日記」。
- (56) 『明治維新人名辞典』1049頁。
- (57) 齊藤治兵衛「清川八郎君国事尽力の来歴」、『史談会速記録』105号(1901年9月): 13-34頁。小山松勝一郎『清河八郎』(9月): 13-34頁。小山松勝一郎『清河八郎』(9月): 13-34頁。山岡鉄舟と松岡万。
- (58) 山岡鉄舟と松岡万。
- (59) 清川八郎『西遊草』、小山松勝一郎編、東京：平凡社、1969。東洋文庫140号、256-7頁。
- (60) 清川が殺された時「ようやくヒュースケン暗殺者は死刑になった」と噂が日本在住の外国人の耳に入った。Von Sieboldの"Open brieven uit Japan"にあり、Hallの日記(1863年6月13日の記入)にも記載されている。アメリカ公使はイギリスのスパイ・ネットワークから同じ情報を得ていた。従って、清川の名は当時のアメリカ政府出版物にも出る："Message of the President of the United States and Accompanying Documents to the Two Houses of Congress at the Commencement of the First Session of the Thirty-Eighth Congress." Part II, Government Printing Office, 1864, 1101頁。
- (61) Conrad Totman: "The Collapse of the Tokugawa Bakufu." Honolulu: University of Hawaii Press, 1980: 48, 92-3頁。
- (62) 小山松勝一郎『新徴組』国書刊行会、1976。
- (63) その名は佐々木只三郎、速見又四郎、高久安次郎、永井寅之助、広瀬六兵衛、依田鉄次郎、徳永登、小山松『清河八郎』220-21頁。
- (64) 清川の殺人についての噂はHall, "Japan through American Eyes" 1863年6月13/15日、小山松『清河八郎』212-222頁。
- (65) すなわち、清川八郎正四位、神田橋直助従四位、美玉三平従四位、安積五郎従四位、池田徳太郎従五位、北有馬太郎従五位、石坂周造従五位。田尻佐『贈位諸賢伝』国友社、1926。
- [付記] 本稿は、1994年3月22日、南麻布の光林寺にあるヒュースケンの墓前において、アメリカ、ドイツ、オランダ在日諸大使臨席のもとに行われた記念儀式の後の講演を日本語に翻訳したものである。なお、この研究にあたり在日オランダ大使ロランド、ミケ・ヴァン・デン・ベルグ夫妻、前在日オランダ大使館文化担当官マリオン・ペンニク氏には大変お世話になった。また、東京大学史料編纂所の宮地正人教授にはご指導を賜り、五野井隆史教授、松井洋子助

手、武中明子氏、鈴木邦子氏には翻訳に際して貴重なご助言を頂いた。なお、ヒュースケンの記念の儀式と講演とは在日オランダ大使館の文化担当官クリスチナ・ヤンセン氏と日蘭協会、日本航空との協力によって実現できたことを付記し、併せて心から感謝の気持を表したい。